
遠enrai雷 黒い明星の下で The under ground star

坂本ヒロノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠 *en* rai 雷 黒い明星の下で *T* h e *u* n d e r *g* r
o u n d s t a r

【Nコード】

N3095D

【作者名】

坂本ヒロノリ

【あらすじ】

レスティナ国の便利屋、カノン・ソリティアの友人である、レオラリアナに視点を置いて、今回は物語が展開されます。（注）作者は坂本ヒロノリです。

(前書き)

なんつーか、もはやなろうのFF作家になってきちゃいました(汗)
自分の趣向バリバリで書いたんで、キャラ崩壊に加えて分かりにく
い描写とかストーリー運びだな、って自分でも思ったりしましたが、
まあ、たぶん大丈夫でしょう(笑)

クリスマスシーズンなのに、内容はクリスマスじゃありません。そ
こを注意してお読みください。

黒い明星の下で

「だあああああ！ だから、オレが悪かったって！」

季節は秋。暦の上ではほぼ冬の、高いような低いような空。肌寒いのか、それともただ単に寒いのか判断しがたい気温。

「うるさいうるさいうるさいー！！」

「姉さん落ち着いて！ ほら、レオラも謝ってるじゃん！ ……つてああ！ いつの間にか変り身に!？」

そんな温かい飲み物が恋しくなる季節、レスティナ国の一角にある、とある便利屋。

近隣住民からの苦情の九割が騒音と、何ともリアクションに困る数字を叩き出したばかりの最中、またしても、いや、今日はいつもよりも更に過激さを増して、オレことレオラの絶叫と、カノン・ソリティアの怒声と、シオン・ソリティアの悲鳴が見事な三重奏を奏でていた。

「カノン！それはシャレになんないって！ 今時四十口径なんて、軍の武装でも火力高すぎ」

「うるさいー！ー！ー！ーい！」

パン、ではなく、ドガンと六発分の破裂音が響き渡る。その正体は、涙目で仁王立ちのカノンの手に握られたデザートイーグルであり、鈍色に光沢を放つボディの発射口からは、硝煙が立ち登っ

る。

このデザートイグルという代物、人間の頭ぐらいならば楽勝で『四散』させることが出来る高火力のハンドガンであり、冗談でも当たろうものなら確実に命を奪うこと間違いナシの武装である。そのことを嫌というほど熟知しているオレは、本気で狭い室内を逃げ回っている。目には、カノンとは別の理由で涙が滲んでいた。その理由は主に、

「死ぬから！ お前この際言っておくけどな、ここでガトリングとか、RPG使ったら部屋どころか家まで吹き飛

ヒュカツ

「うおっ！ オレのシャツの両肩右わき腹左腕二の腕右腕袖口ズボンの両裾がナイフで壁に縫い付けられた!？」

「……ナイフでなら、虫の標本みたいにキレイに生け捕りにできるよな。そのあとじっくりと皮を剥いで皮を剥いで皮を剥いで皮を剥いで謝罪文を原稿用紙三百枚（改行なし）でみっちり書いてもらうプランで行こう。うんそうしよう」

「あの……カノンさん？ そんなんやったら痛いどころか、下手したら死んじゃうんじゃないんでしょうか？」

「うん、まあ……死ぬんじゃない？」

「やっぱムリ……!?!」

……主に、恐怖によって。

こうして今現在、オレは命の危機にさらされている訳だが、こうなった理由は、今より二十分ほど遡る。

「おーす」

ドアを開けると、カランと来客を告げる鐘が鳴る。この音を適当に聞き流し、オレは十分後には阿鼻叫喚の地獄絵図へと変貌する便利屋の店内へと足を踏み入れた。

ところが、今日は忙しいのか、いつもならシオンかカノンが対応

に来るのだが、まったく誰の来る気配も無い。

「……忙しい、のか？」

誰の来る気配も無ければ、誰かがいる気配も希薄だった。……多
少なりとは怪しいので、とりあえず更に奥に進む。

応接間へ足を運ぶと、この家の住人シオンが熱心に何かを読んでいた。何気に辞書並みの分厚さで、表紙は黒一色。いや、もうなんか本当に辞書読んでるんじゃないだろうか。

シオンは本に夢中らしい。その表情は、本の中の世界に入り込んでいて、到底声をかけられるものではなかった。しばらくその微笑ましい光景を眺めていると、シオンはようやく視線を上げた。そしてオレがいることに気がつくと、挨拶よりも急いで近くにあった本を本に挟み、ソファアールから腰を上げた。

「レ、レオラいらっしやい。その……いつからいた？」

「ん？ 五分ぐらい前だけど、気にするなって。人間誰でも不注意ぐらいならあるさ」

「あ、うん。ごめん……」

シオンはしゅんと頂垂れてしまった。でもなんだかその仕草が可愛くて、自然と笑みが零れる。そしてその小さな頭を見ていたら、
なんだか無性に撫でてやりたくなった。

「え？ うわ！ レオラなにしてんの！？」

「え、何って、頭撫でてるだけだけど。っーか、そんなに気にすん
なって。オレがいいって言うてるんだから。な？」

「うん、そうだね。……あ、外寒くなかった？ 飲み物持ってくる
けど、飲み物は紅茶とコーヒーどっちがいい？」

そう言うシオンの表情は、すっかりいつも通りの明るい表情に戻
っている。

「あ、悪いなシオン。ちようど何か飲みたかったんだ。それじゃあ、
紅茶で頼む」

「うん。ちよつと待っててね、今淹れてくるから」

シオンは、パタパタとスリッパを鳴らしながら、部屋を出て行く

た。その様子を眺め、カノンにもアレぐらいの器量があればな、なんて、本人が聞いたら激怒しそうなことをぼんやりと考えていた。

そもそも、今日ここに来た理由は、友人から自分を介してカノンに頼まれた依頼を、報告しに来るといふものだったはずなのだが、その依頼された主であるはずであるカノンは一体なにをしているのか。

「まったく、アイツ、こんなことじゃあ仕事なくすぞ」

言って、思わず苦笑してしまう。そうか、アイツ、元から仕事なんてあんまりないんだっけ。まったく、そんな状況でもあの明るさで生きていけるのだから、あの存在はけっこう貴重なのかもしれない。

「おまたせー」

無駄な時間を過ごしていると、シオンがお盆に二つのティーカップを載せて、見た目不相応な程安定した足取りでこちらに運んできてくれた。まったくぶれる様子も無く、自分の目の前には、あつという間に紅茶やミルクが準備されていく。これもカノンがズボラな故の賜物なのだとしたら、この少年はなんと救われないことだろうと、しみじみと感じる。

「レオラ……？ どうしたの、僕のことじっと見たりして。なんか顔についてる？」

「ああ、いや、なかなかお前も苦労してるなって」

「……？」

シオンは意味が分からないといった風に目をパチクリさせている。ああ、なんだか、こんな弟が少しだけ欲しくなった。

それは、兄や姉しかいなかった自分の過去からの願望なのかもしれない。

「じゃあ、冷める前にいただくか。ほら、シオンも行儀なんか遠慮

すんなって。オレはまだ客じゃなくて友達として来てるんだから」
「うん。じゃあ一緒に飲むけど……なんかレオラいつもと口調違う
ない？ なんてゆうか、饒舌なのかな。長セリフが多いような」
「ああ、その原因？ それは、これを書いているのが全然名前が
知れていない作者が書いたファンフィクションだからであって、製
造元がアオキチヒロではないからさ。まあ、とりあえず本編とは別
物として考えてくれるとありがたい」
「やっぱり饒舌だね。うん、とりあえず大人の事情っぽいから何も
聞かないでおくよ」

お互いに笑いあい、紅茶を一口いただく。うん、可もなく不可も
なく、普通にうまい。

「はあ、やっぱり温かい飲み物がおいしいね。これにケーキみたい
なお茶請けでもあつたら最高なんだけど」

「……お茶請けって、また爺臭い言葉を。シオンお前どこでそんな
言葉学んで来るんだよ。さっきの極厚本みたいなからか？」

「うーん、大体は本からだけど、姉さんもよく言ってるよ。『ポテ
チチョコはお茶請けとして認めない！』って」

「……ああ、なんつーかアイツの言いそうなことだ。シオン、そう
いう場合はな、ポテチなんて揚げ物なんだから、紅茶と合うはずな
いだろぅが。って突っ込まないとダメだぞ。アイツ調子に乗るから
その調子だとアレだろ？ ソルトキャラメルとかにも手をつけてた
りして」

「あ、正解。よくわかったねレオラ。僕はアレどうも苦手だな。甘
じょっぱいって言うのかな。ああいう複雑な味より、クッキーとか
の普通に甘いものの方が僕には合うみたい」

「同感だな。そもそも、なんで甘いものに対して塩辛いものを入れ
るなんて発想が湧いてくるんだよ。確かに西瓜とかに塩かける人も
いるけど、邪道だ邪道」

この会話が無ければ、この後に訪れる悲劇は免れたかもしれな
いけれども、過去の出来事は変えられるはずもなく、無常にもシオン

は、その一言を口にしてしまう。

「ねえレオラ。実は、とっておきの秘密があるんだけど」

「え？」

紅茶も飲み終わり、菓子雑談からも多少外れたころ、急にシオンがそんな風に切り出した。

「実は、姉さんが自分の部屋に、とっておきのお菓子を隠してるみたいなんだ。僕には気づかれてないと思ってるみたいなんだ。なんでも、期間限定で販売個数五百個の幻のソルトキャラメルらしいんだけど……」

「なんだそりゃ。そもそもキャラメルって、限定品作るほど売れるのか？ …… ってまさか」

俺の言葉に、シオンは、不適に笑った。

……なるほど、ソルトキャラメルは何度か食べたことが、全て撃沈という負けっぱなしの過去があるとはいえ、怖いもの見たさもある。それに、カノンが目をつけたこれだったら……

「オーケーシオン。お前の策に乗るぜ。さあ、そうと決まればカノンが帰ってくる前にさっさと食べちまおう」

「了解。じゃあ今から持ってくるね」

シオンの駆けてゆく後姿に、何故か異常に後頭部がむず痒くなっただが、まあ、気のせいだろう。

シオンは戻ってきたときに、小さな黄色の小箱を抱えてきた。なんでも、この箱に話のキャラメルが入っているらしい。

「……じゃあ、開けるぞ」

「う、うん」

覚悟していたとはいえ、やはりこういう瞬間は緊張する。もし、後からカノンに見つかれば、この世とオサラバしなければならぬという状況での、緊張感と背徳感が、より一層オレらの行為を加速させる。

「せーのっ！」

ガバツと勢いよく腕を振り上げ、オレは箱を開封した。するとそこには、小さな塊が三つ入っていた。これがシオンの言うソルトキヤラメルというやつだろうか。

「ほらレオラ、なにしてるの？ はやくしないと姉さん帰ってきちゃうよ」

「あ、ああ、そうだな。にしても、これ本当に食えるのか？ イロモノ系は現地の人でも罰ゲームに使うとか聞いたことあるぞ？」

「ああもう、レオラの根性なし。もういいよ、僕が先に食べるからシオンはそう言っと、手に持っていたキヤラメルを口の中に放り込んだ。」

しばし静寂。シオンは口の中でキヤラメルを転がして味を吟味しているが、その表情が段々と歪んできたのは気のせいだろうか。

そこまで不味そうに食べられると、逆に食べてしまいたくなるのは人間の性か。俺も手に持っていたキヤラメルを口に放り込む。

「……なんつーか、これは」

思わずシオンと目が合つて苦笑してしまう。とにかくこれは、形容のしがたい味だった。最初はキヤラメルの甘さがするのだが、時間が経つにつれて、徐々にしょっぱさがどこからともなく現れる。結果、西瓜に塩をかけて食べているような気分になり、西瓜には間違つても塩なんかかけないオレは、何とも微妙な顔をするほかにないのだ。まあ、それはシオンも同じようぞ。

「ねえレオラ」

「ん？ なんだ、不味いなら出しちまえよ」

「いや、僕は大丈夫だけど……こんなのが好きだ何て、女の人はいくわからないね」

「はは、そりゃ確かに。けどまあ、本人が好きだからいいんじゃないか？ さて、それじゃあ帰ってくる前にとつと片付け」

「ただいまシオンー！ お姉さんがただいま帰りましたよー

「ー！」

箱に蓋を被せた瞬間、勢いよく玄関が開く音が家全体に響き渡った。そして、掃き慣らしたブーツをゴツゴツと鳴らしながら、歩み寄るはカノンの気配。

「レ、レオラ！ どうするの！？」

「バカ！ 俺に聞いてないで早くこれを隠さないと！」

俺は手早く、そのあたりにあったソファアの裏に箱を隠した。ちよつとした小細工だが、手に持っているよりは多少マシだろう。

それから待つこと五秒。カノンが実に楽しそうに荷物を抱えて現れた。

「たっだいま……ってアレ？ なんでここにレオラがいのの？

もしかしてシオンが攻略対象ですか？」

「ア、アホ。今日は仕事の話だ。前に話してた、オレの友達からの言伝を伝えに来たんだよ」

「……なんだっけそれ？」

「っおい！ お前、仕事の話まで忘れてんのか！？」

「うそうそ。いくら俺でもそこまで抜けてないって。とりあえず仕事の話用にこのあたりにメモが……」

カノンはソファアの上に荷物を置き、色々な物が積み上げられた机の上を物色し始めた。

……軽口を叩けるあたり、まだキャラメルの件については気づいていないらしい。内心ほっとしながら、次策を練る。表情に出さないように慎重に事を進めなければなるまい。

まずはこの部屋から抜け出して、どこか安全な場所に、

「ん？ この箱って……」

壮大なるオレのプランに自画自賛しているうちに、目の前からカノンの姿が消えていた。

そしてその声は、あるうことが後から聞こえているような気がしないでもない。俺の後には、確かとても大事な隠し物があったような気がしないでもない。そして、これからオレに大厄災が降りかかる気がしないでもない。

「キャラメル箱だよな……なんでこんなところに？ シオンはこのこと知らないはずだし……」

カノンはゆっくりと首をこちらに回した。俺は一生懸命目をそむけているが、なんか顔の左側が熱い。これが熱視線か……なんて余裕をかましている余裕なんてどこにあるのだろう。レオラマストダィ。そんな不吉な文章が頭を過ぎる。

「レオラ」

ああ、怖い。怖すぎて失禁しかねない。けれど、まだだ。まだ挽回できる範囲のはずだ。そんな根拠の無い励ましで、自らの士気を高める。

……よし、オーケーだ。パンチでもキックでも暴言でも何でも来やがれ！

今まさに、カノンと向き合おうとオレが向きを変えた瞬間、破裂音が聞こえると同じくして、左頬を何かが掠めていった。

オレの目の前には、カチャリと音を鳴らしながら、リボルバーを構えるカノンの姿。

「レオラ、死んで？」

そうして彼女は、悲しそうに笑う。一瞬で危機を察したオレは、ドアまで駆け出し、間一髪初撃は逃れることが出来た。けれどカノンは当たるとか当たらないとか関係ないらしい。既に壁に隠れたオレに向かってリボルバーの重い引き金を引いた。連続で五回ほど。

以上、回想終わり。

「クソツッ！ このままじゃ……」

かつこよく悪態を吐いてみるが、本当にこのままじゃ命が危ない。わりとリアルにオレを殺そうとしているカノンの機嫌を取り戻すには、オレらの食べたキャラメルを献上するのが一番だが、シオンが期間中の限定商品だと言っていたから、入手は難しいだろう。それに、あんな人間兵器を引き連れて街中に出たりしたら、明日からオ

レはお尋ね者になってしまふ。

とすると、気乗りしないが方法は一つしかない。

「悪いな、カノン。今度ギリ貧覚悟で何か甘いもの奢るからさ、今回は勘弁してくれ」

とんでもない銃声とシオンの悲鳴の中、聞こえるはずの無い一言を呟く。女に手を上げるのはなるべくなら避けたかったが、さすがに死にたくはないので今回は仕方が無いというものだ。

懐に収めたナイフを取り出す。バタフライナイフの刃を出さずに柄を握るだけ。狙うのは頸椎、もしくは鳩尾を打突しての気絶。周囲の雑音を遮断して、神経を集中させる。

標的は推測で約二メートル、多めに見積もって約三メートル。突撃のタイミングは弾のリロード時の一瞬の間。突撃の際に足元に転がっているピンを目の前に投げつけ、意識をオレから逸らせさせる。そして気絶させ終了。

脳内でのシュミレートは円滑に進んでいく。そこにいるオレは一分の間もなく、オレであってオレではないような動きをしている。

そう、夢の中のオレはまるで、オレの中にもう一人の人間のような

カチン、と撃鉄のみが落ちる音がする。それは自分がどんな状況になったかを理解していないように、何度も、何度も繰り返される。

今だ。

走り出す体は豹のようにしなやかにソファアの影から滑り出す。

カノンは気付いていない。先ほど準備したガラス瓶をカノン向かって投げつけた。

「え……っ！」

一瞬、カノンの体が硬直する。視線は高いままで、瓶しか見えていない。その様子を、低い姿勢で疾走しながら確認する。カノンは難なくこの瓶を避けるだろう。その瞬間、一度も失敗は許されないが、瞬間で全ては決まる。

ゆっくりと流れる時の中で、カノンの体が微かに傾く。表情が変わらずに動いているあたり、全て無意識下での行動らしいが、中々出来ることではない。……感心している場合ではないか。

一気に距離を詰める。ピンがカノンの側頭部を通り過ぎるのを確認し、オレは下から突き上げるように、カノンの鳩尾に拳を突き出した。

「へ？」

間抜けな声が聞こえる。けれど、その声を上げたのは、拳を受けるはずだったカノンではなく、オレだった。

世界が一瞬で反転したかと思えば、そのまま頭から床に突っ込み一回転二回転。ゴロゴロと転がったかと思うと、背中から壁に激突した。

「あ……づう……」

鈍い痛みが全身を襲う。あれほどの転倒、床に体を激しく打ちつけたのだらう。打ち所が悪かったのか、なんだか視界が歪んだまま定まらない。

朦朧とした頭で、さっきの状況を思い返すが、まったく理解できない。まず、何故オレは地面に突っ伏して、何故、カノンは平然と立っているのだらう。オレの中では完全に逆の立場になるものだと思っただけで固かったため、余計にほかの事を考えようとすると、思考が止まってしまふ。

段々と世界がブラックアウトしていく。そんな曖昧な意識で、ソリティア姉弟の、誰かを心配する声が聞こえた。

先ほどまで真っ暗だったはずの世界が、いつの間にか光を放っていた。重い瞼越しに、強い光なのだと思える。

風はあくまでも爽やかに、大地から伝わる温もりは、きっと太陽光だけではないはずだ。

だから、ここは夢の世界。オレが眠ってしまったってやってきたのが、寝ているはずのオレが起きている世界なんてのは矛盾しているが、夢なんて矛盾だらけだとオレは知っているのに、ついそんなことを考えてしまった。

適度な温かさが、更なる眠りを誘ってくる。この際限なく沸くいつまでも眠っていたい欲求をばちばち抑えつつ、オレは起きることにした。眠るのは、まあ現実だけで結構だろうし。

瞼を開け、予想以上の太陽のまぶしさに目を細める。しばらくの間、手で覆って光を遮っていると、早くに目は慣れてくれた。

緩慢な動作で立ち上がってみると、そこは、いつかどこかで見たような光景だった。

緑が生い茂る獣道。以前はきちんと整備されていて、その奥の森の中では、いつも小さな少年が一人で遊んでいた。

少年は呟く、誰かと遊びたいと。

家では家族が優しくしてくれるが、みんながみんなオレと遊んでくれているわけではなかった。だから、みんなが忙しいなら、一人で遊ぶしかなかった。

「……ここは」

どこかで見た獣道。以前は石畳まで敷かれていた豪華な歩道だったのだが、今は見る影もなく荒れ果てている。

邪魔な草木をナイフでなぎ払いながら、坂の上を目指す。

そんな日々慣れたころ、女の人が出来た。オレは遊び相手が出来たのだと、嬉しくて仕方なかった。だから、彼女が「明日は来ちゃダメ」という言いつけを守って、次の日は家にいることにした。

しばらく歩くと、以前一度見た門が見えてきた。その門は記憶と寸分違わず、錆び切って朽ち果てていた。

「やっぱり……ここは、アゲハの……」
錆びた門のその奥に、誰かがいるような気がした。いや、多分いるだろう。オレがここまで来るのを待っている、酔狂なヤツが。わざわざ思い通りに動くのも癪だが、会わない事には始まらない。オレは、しばらくぶりに門の奥に足を踏み入れた。

昨日張り替えたばかりの白い壁紙を見て、姉さんは「まるでアゲハの心みたいね」と笑った。意味は分からなかったが、オレは笑っておいた。そうすれば、姉さんはよるこんでくれるから。

その真つ白な壁紙は、今はダレかの体液で紅く朱く染まっている。ドロドロとした何かも張り付いて、重力に従って、壁を下へと這って血で汚す。

そこに、姉さんだったものの姿もあった。姉さんは動かない。喋らない。そもそも、アレは、人間ですら……
姉さん、姉さん姉さん、姉さん姉さん姉さんねえさんねえさんねえさんねえ、さん

広い庭に出る。ここから屋敷の外観を望むことが出来るが、相変わらず広い。一大家族が住むには明らかに不必要な広さである。以前

ここに自分の片割れが住んでいたかと思うと、羨ましい気がしないでもない。

「羨ましかったのか？ お前が望むなら、別にオレは住んでもらっても構わないが」

背後から、オレの声が聞こえてくる。いや、正確には、オレと『同じ』声が聞こえてくる。振り返らずに、返事だけを返す。

「……いいや、遠慮する。オレは血生臭い屋敷に住む気なんて毛頭ない。それに、ここに住んだらいろんな人に迷惑がかかるだろ」

「ふう……つれないな、レオラ」

「ああ、悪いな」

「心にも思っていないくせに、よく言う。そういうのは、せめて顔を見てから言え」

相変わらず、こいつの喋り方は無性に腹が立つ。いい加減我慢の限界が来て、その、さつきから動こうとしないヤツを睨みつけてやった。

「そう怖い顔をするな。久しぶりの会話じゃないか。めったに無いチャンスなんだから、有効に使うべきじゃないか？」

「オレは望んでお前に会いに来たわけじゃない。っーか家に帰せ。カノンとまだ決着がついてないんだよ」

「あんなもの放っておけ。それよりも、いつまで駄々を捏ねるつもりだ？ いい加減、ここに呼ばれた理由と、ここがどんな世界かを考えたら、これから起こることは想像に難くないと思うが」

ヤツは相変わらず微笑のままだ。けれど、その目はオレと同じ赤にも関わらず、何か殺意のようなモノが見て取れる。

「……ああ、そうだな。なんとなく想像はついた。……久しぶりだな」

「ああ、久しぶりだ。レオラ」

ああ、本当に

「出来れば会いたく無かったよ。アゲハ・ストレイン」

「随分ご挨拶じゃないか。礼儀はセリさんにならってないのか？
それとも忘れたか？」

いつも……とは言っても、以前よりも毒々しさをアップしたアゲ
八が、やはり微笑を崩さずにオレを挑発している。既に不快感は限
界値を振り切っているが、こいつを殴るのはまた後でも出来る。今
は、オレがここに呼ばれた理由をヤツの口から聞かねばなるまい。

「で、用件はなんだ。お前のことだから、つまらないことじゃない
だろうけど」

オレのその一言で、アゲ八の目が変わった。

オレを見据える目はただ冷たく、何かを見ているのかも怪しいぐ
らい、瞬き一つしない。

いつ来るか分からない攻撃に対して、オレが身構えていると、ア
ゲ八は急に笑い始めた。

クツクツと、小さく肩を震わせて、笑っている。

「……ああ、そうか。そういうことか。つまらないことか。ハハッ、
いいぜレオラ。お前ならそう言うと思ったよ。そうじゃなきゃ、オ
レがお前を呼んだ意味がないからな」

アゲ八はまだ笑っている。オレはアゲ八の言っていることの意味
が分からない。そう言うと思った？ 呼んだ意味がない？

ヤツの意味するところを探っていると、アゲ八が何かをこちらに
投げつけてきた。鈍く光るそれは、投擲用のナイフで、何とか身を
擦ってかわす。

「なっ、何しやがる！ 当たったらどうするんだ！」

「当てるつもりだったんだが……鈍ったか。まあいい。」

それに、この程度のこととて悩むような弱い宿主に、万が一に
もオレが負けるなんて、そんなことは有り得ない」

「つてめえ……だから一体何の話をしてるんだよ！」

アゲ八は先ほどの微笑から一転して、憂いの表情で、青空を見上
げている。右手には投擲用のナイフが三本、左手には、オレと同じ

バタフライナイフを握っている。

「まったく……お前に一度託したつもりだったが……気が変わった」
空気が凍る。アゲハのさっきの一言で十分だった。場は一瞬で戦いへと切り替えられ、ヤツはゆっくりと、オレと同じ得物をオレと対の手に握る。

その動作に、体は自然とナイフを構えた。目の奥が熱い。緊張が恐怖か、その暑さは、確実にオレの集中力を削いでいく。

オレが構えるのを確認してから、ヤツも構える。オレとは違う、アゲハ・ストレインとしての構え。そこには、オレのような無駄さなどどこにもなかった。

そして、二人で一人の戦いは、

「その体、今一度貰い受ける」

アゲハ・ストレインの一言で幕を開けた。

ヤツの体が沈んだと視認した刹那、足音すら立てず、ましてや気配も姿も何一つオレに悟らせず、ヤツはオレの足元まで迫り、ナイフの切っ先をオレの心臓に向けていた。

「さあ、レオラ。殺しあおう　！」

言うのが早いのか、ヤツの手に握られたナイフは、一直線へオレの心臓へ突き出された。

「レオラ！　レオラ！」

「あー、こりゃダメだな。死亡フラグが立ったとおれは見た。ほら

シオン、こんな不屈きモノの金髪野郎なんかほっておこうぜ」

「何言ってるの姉さん！？ レオラもしかしたら死んじゃうかもしれないんだよ！？」

「うーん、まあ、因果応報自業自得？」

「とんでもない白状者！？ もついいよ！ 姉さんが看病しないなら僕が看病する。その代わりに、僕は今日からグレます。姉さんなんて大嫌いだ」

「うそうそ！ 今までの発言は全て嘘ですよシオン様！ だからおれを見捨てないでくださいお願いします。お詫びとしてさつき買ってきたプリンを献上いたしますから、どうかその怒りをお諫めくださいませ！」

「……プリン？」

「イエスサー。実は先ほど店頭五十個限定の焼きプリンなんか入手しちゃいまして。なんつーか試食した感想だと、まるで舌解けは絹のようになめらかで、とてもとても普通に味わえるシロモノじゃない、ゼ。みたいな？」

「……姉さん」

「ん？ どーしたシオン？」

「プリンでも、食べようか？」

「ッ！」

到底反応など出来ない速度で突き出される刺突を、皮一枚断つ事で、無理矢理に体を動かし、致命傷を避ける。

「あ……づ……」

しかし、喻え一撃が致命傷から遠くとも、その小さな傷が積み重なれば、いずれ死に至るのは目に見えている。けれども、避けるこ

とが出来ない。こればかりはカンや運だけで凌げる問題ではないからだ、ただ予想しただけで左右に動こうものなら、自分から刃に飛び込む自殺行為をすることと、何ら変わりはない。だから、オレはこうして骨を断たれずに生きている。もし真つ向から立ち向かおうものなら、一撃で勝負は決していたはずだ。

「なんだ、つまらないなレオラ。もつと実力があるものだと思っていたが、見込み違いか。どうやら、あの時計男の時からあまり成長してないみたいだな」

「うる、せえ！」

明らかに手を抜かれた斬撃。それを上半身を反らしてやり過ごし、体を元に戻す反動で、右手のナイフで突きを繰り出す。

アゲハにはそれが手に取るようにわかつていたのだろう、ヤツは口端だけで笑うと、オレの突き出した右腕を脇にすかし、体を半回転腕を左肩にかけて背中に背負い込むと、そのまま勢いよくオレを投げた。

一瞬の浮遊感。その後すぐに視界が飛ぶように回転し、背中には馬車で激突されたような衝撃が走った。頭はクラクラとして、何も考えられない。意識が未だにあるのは、この背中 of 理不尽なまでの痛みだろう。受身さえ取る暇が無かったので、衝撃は分散されずに、硬い地面とオレの背中だけに集中している。

息がし辛い。喉と心臓は、呼吸の仕方を忘れてしまったのではないだろうか、だって、さっきから、こんなにせいぜいと息を吐いて、吸っているのに、頭は霞がかかったままで、心臓はまだ酸素が足りない、ドクドクと爆発しそうに脈打っている。

「ふん……頭も弱ければ体も弱いか。健全な精神でなくとも肉体は鍛えられるというのに、貴様、それすら怠ったか」

明確な殺意が籠った罵倒。そんなこと言われても、今は体が全く言うことを聞いてくれない。今更だが、さっき投げられた衝撃で脳震盪でも起こしているのかもしれない。

ああ、世界が揺らいでいる。それはゆらりゆらりと塵気楼のよう

に霞んでぼやけて、鏡面体のようにオレの姿を映し出す。やがてその俺の姿は段々と小さくなり、今のオレの腰程の幼さにまでなっていた。

小さなオレは、ただどこかに視線を向けたまま動かない。どこを見ているのかと、オレもそっちに視線を向け、

「……え？」

ただ、そんな簡単な、呆けた言葉しか口に出来なかった。

そこは出来の悪いプールみたいところで、どんな風にも出来が悪いのかというと、水が赤いところとか、グチャグチャした何かが水に浮いているところとか、そもそも泳げる深さまで水が溜まっていないところとか、何より、さっきからプールに入っている人たちが、皆ピクリとも動かないところとか

「……やめろ」

誰に向けたところで、この映像が止まるだろうか、この映像は、間違いなくこの目を通してオレが見たもの。ただ、そのときのオレがレオラではなく、アゲハ・ストレインという殺人鬼の場合だっただけ。

「……やめろ」

誰かがスーツを真っ赤に染めて立っている。ああ、よく知っている。よく知っているさ。だから、これ以上、その人が出てくる映像を、オレの頭に、

「姉さん！」

小さなオレはそう叫んで駆け出す。走りよって揺すっているものは、もうそれは人間と呼べないような肉片。少年は、既に生き物として存在していないものに、いつもと同じように呼びかけて、名前を呼んでいる。滑稽で、滑稽で、とてもじゃないけど、正気でいられない。

「やめろ……！」

誰かが、泣きじゃくる少年に近づいてくる。なんでアンタがこんなところにいるんだ、なんて問いただしたい。けれど、これはオレ

の記憶でしかない。だから、師範代にはオレの声が届かない。その状況で、なんで、アンタはそんなに悲しそうな顔で立っているんだ。「やめる……!!」

映像が途切れ始める。調子の悪い映写機を見ているようで、ざーざーというノイズと共に黒線が走り始める。頭は割れてしまいそうなほど痛くて、声も出ない。もしかしたら、息もしていないんじゃないだろうか、自分の喉下に手を当てようとした。

その瞬間、最後に、一枚の写真が、オレの頭に流れ込んできた。

どこで見たのかも知らない。どこで知ったのかもわからない。けれど、その写真は確実に、ストレイン一家の肉片が、そこらかしこの野犬や鳥に喰らわれている静止画。その写真があまりにも可哀相で切なくて、オレは無意識に、「ごめんなさい」と口にしていった。

「ようやく戻ってきたか」

気がつくと、オレは地面に仰向けになったままの状態だった。先ほどからあまり時間も経っていないらしい。アゲハは庭にある噴水に腰掛けていた。

「アゲハ……お前、何を」

「言うな。オレまで思い出しちまうだろうが。……これが、大切な者を失くす辛さだ。ようやく理解したか」

アゲハは再びナイフを取り出す。オレも跳ね起きて、遅れないようにナイフを構える。まだ気分が優れないが、そんなことを言っている場合ではない。

「アゲハ・ストレインは戸籍上まだ生きている。けれど、戸籍なんて曖昧だ。今実質的に生きているのは間違いない、レオラという一人物なんだから」

アゲハの体がゆらりと揺れる。今度は先手を取らせまいと距離を

詰めるつもりだったが、ヤツの足取りから何か嫌なものを感じて、近づくに近づけない。

「オレはそれでもよかった。だって、父さんや母さんや兄さんや姉さんは死んでしまったけれど、皆が生きていたことを覚えていて、自らの行いを悔いてくれている人がいたんだから」

ヤツの姿が掻き消える。姿が見えないままで棒立ちしているほど俺も間抜けではない。横っ飛びで位置を変えると、屋敷の壁に張り付いて背後からの敵襲を防ぐ。

「それだけで涙が出るほど幸せだった。彼女はオレを覚えていてくれた。幻覚如きに負けそうだったオレを、元に引き戻してくれた。命を奪おうとしていたのに、今では親身になって話を聞いてくれる」

ヒュンと、何かが空を切る音がする。ナイフの投擲音だと判断出来るまで時間がかかった。タイミングをずらして投げられたナイフは、オレの右肩と左腿の肉を抉って壁に刺さる。足が限界を訴え、たまらず膝をつく。

「嬉しかった。楽しかった。何もかも許せる気がした。彼女が家族を殺したことは許さないけど、彼女が覚えてくれているのなら忘れてあげることにした。彼女が困っているのなら、相談に乗ってあげたりもした」

今度は小細工無しで、アゲ八がゆっくりと俺に歩み寄ってくる。出血は時間が経って固まってはいるが、失くした血は結構な量らしい。まともな思考回路が戻ってこない。それなのに、もうアゲ八は目の前まで来ていた。

「けれど、二日前。たった二日前だ。オレにとってもお前にとっても大事な日。そんな大事な日に、お前は自分がしたことすら覚えていない。それがどういうことか分かるか？ お前は、オレだけでなくセリさんの扱いまでもぞんざいにしゃがった。別にセリさんを庇おうっていうわけじゃない。ただ、お前の、その身勝手な自己中心的考えが、吐き気がするほど気に食わないんだよ！」

ここで、アゲ八は初めて激昂した。速度はさっきなんか比べ物に

ならないくらい上がっていて、目の焦点すら定まっていないうれは、モロに左腕にナイフを刺された。

「が、あつ！」

「ああそうさ、ただオレは気に食わなかっただけさ。こんなもの、幼稚で陳腐なオレの感情でしかない。けれど、オレは、お前のあの行動だけは許せない。大切なものをお前は手に入れたのに、自分で大切なものを蔑ろにするなんて、そんなの、そんなの！」

アゲハはナイフを引き抜くと、腹に蹴りを入れた。堪えきれずにオレは吹き飛ばされ地面を滑る。もう体はピクリとも動かない。度重なる斬撃に精神的なショック。もう限界なんてとうに超えているはずだ。

「は、あ は、は」

虚ろな瞳で、空を仰ぐ。雲一つない空は、どこまでも突き抜けているようだった。ああ、レオラであるオレが、このストレインの家で死ぬなんて、ふざけているのにも程がある。

上を見たまま、いつまでも止めが来ないのを不思議に思った。鈍重になった体を懸命に動かし、アゲハの姿をなんとか視界に納めた。アゲハは、泣いていた。

「そんなの、あんまりにも惨すぎる。オレだけじゃない。オレの家族に対しても、大切な人を亡くした人間全てに対しても、その行動はあんまりにも惨すぎるんだ。だから、レオラ、オレは再び殺人鬼になる。たった一人を殺すために、たった一人の大切な人を、もう一度だけ殺すチャンスを得るために」

アゲハは流れる涙を拭おうともせず、オレに止めをさすわけでもなく、ただ立ち尽くしている。

「……いや、そんなことは、今考えるべきではない。こいつは、今さつき、何と言った？」

「……おい、アゲハ。お前、さつき何て言った？」

「……聞こえなかったのか、それとも意味を問いただしているのか。どちらでも構わないが、もう一度言ってみよう」

ヤツの口の動きが、一語一語紡いでいく。ヤツが口にした人物は、ヤツが口にしていい名前ではなくて、更に、その人を、こいつは、コロすと言っている。

体に、血が戻ってくる。いや、ただ血の巡りがよくなっただけだろうが、さっきまで機能を停止しそうになっていたポンプが動き出しただけで、ここまで動きがよくなるものだろうか。一番の原因は、ヤツの言葉だろうが。

その言葉があんまりにもムカついて、師範代の恩義も忘れてそんなことを言っているこいつにもムカついて、全て捨ててもいいから、こいつを殺すと、物騒な考えが頭を過ぎった。すると、不思議と、体の倦怠感や痛みが消え去って行った。ならば、今のオレにすることなんか一つしかあるまい。せいぜい、この体が朽ちるまでに、ヤツの息の根を止めるか、もしくは、最悪相打ちで決着をつけるとしよう。

「……ざけんなよ」

「……なに？」

オレの呟きに、アゲハは眉を顰めた。聞こえなかつたのか真意を問いただしているのか、どちらかは分からないが、もう、相手の事なんか気にしていられるほどこちらでも冷静ではない。

「ざけんなよクソ野郎！ 自分ばっかり言いたいこと言いやがって！ こつちがどれほどお前に言いたい事があるか……！」

いや、実際は言いたいことなんてほんの二、三個ほどだろう、語るべきは口ではないと、この体が理解している。

「もう有りすぎて言葉になんか出来ない。だから、オレは、お前を止める。殺してなんかやらない。一生オレの中で生きて、一生さっきのセリフについて謝罪させてやる」

「よく言いやがったレオラ。こつちもようやくお前の一言で踏ん切りがついた。見る影もなく肉片に変えてやるよ！」

お互いに全力で吼える。血を失ったことなんて関係ない。体が傷ついていても関係ない。

だって、オレの心は、まだこんなにも折れずに立ち上がっているのだから。

「おおおおおおおおお！！！！」

「はあああああああー！！！」

互いの刃が交錯する。金属音を立てて火花を散らした刃は、一度離れても吸い寄せられるかのように、またしてもお互いの刃でせめぎ合うのみ。

ようやく、ようやくだが、やっと気付くことができた。

何故オレがヤツに勝てないのか。何故オレが、ヤツと同じ体なのに、同じ動きが出来ないのか。つまり、その仮定こそが間違っていたのだ。

同じ体ならば、実力は同じで当然。同じ体ならば、同じ動きが出来るのは当たり前。そんなことに、今まで何故気付かなかったのか。違っていたのか心。オレの弱い心こそが最大の枷だったのだ。

躊躇い、それこそがオレの動きを捉えていたのなら、師範代を無碍に扱うこいつに、躊躇う心など持ち合わせてはいない！

「貴様何故立つ！ お前はもう彼女を捨てたのではないのか！」

「違う！ そもそも、あんな現実直視できてたまるか！ 師範代があんなことになっていて、オレは結果しか見れなかった。助けることが出来なかったと自分に愕然とした。だから、師範代が無事だと分かって、自分が惨めな気がして逃げ出した。」

……言うてやるよ。もし目の前で師範代に危険が及んだなら、オレ絶対に師範代を見捨てるなんてことはしない！」

この間五合の攻防。無音の屋敷に響き渡る剣戟は、更に熾烈さを増していく。

「言い切れるかこの大馬鹿者！ 貴様がいくら弁明しようと、オレ

には言い逃れをしているようにしか見えん！ その減らず口はオレを倒してからにしろ！」

ナイフをわざと空振っての後回し蹴りを、軽くしゃがみ前進しながら避ける。そのままナイフを握った手で思いつきりわき腹をぶん殴る。

「減らず口はお前もだろうが！ 大体、てめえがム力ついたから師範代を殺すなんて、そんなこと許されるか！ 大切な人を守るとか何だかんだ言いながら、結局は自分ができてないなら、そんなものはエゴだ！」

「ッ！ 黙れ黙れ黙れ！ お前に何がわかる、目の前で家族が惨殺された気持ちを！ 何もすることが出来なかった自らの非力を呪ったことがあるのかレオラ！」

「そんなもの知るか！ オレは今、お前が言っただよ様な大切なものを守るために戦ってるんだよ！ そんなものによそ見している暇があるんだったら、ちつとは周りを警戒しやがれこのボケ！」

「しまっ!?!」

アゲハが気付いたときには、もう遅かった。

オレは地面に落ちていた投擲用のナイフをアゲハに向かって投げつける。この一撃は防がれるものの、アゲハがナイフを振り上げ、投擲から身を守っている間、オレはゆっくりと、アゲハの左胸にナイフ突き刺した。

「美味しいね姉さん」

「うん。なんつーか絹の喉ごしっつーのかな。今度からプリン買う時はこの銘柄にするかな」

「……アレ？ 姉さん。なんで僕たちプリン食べてるんだっけ？」

「ん？ なんでだっけ？ まあ、別に忘れるようなことだからどうでもいいことなんじゃね？」

「うーん、まあ、そうだね。あ、姉さん二つ目食べていい？」

「あ、それじゃあおれも二つ目を」

ピンポーン。

「姉さん。お客さんかな？」

「……さあ？ ちよつと見て来るから、シオンはここで待って」

「いや、迎えに来る必要はない。勝手にお邪魔させてもらうよ」

「！ あ、あなたは！」

ざあ、と。一面の草木が音を立て波打つ。ナイフが刺さった一瞬の間なのに、その脈打つような胎動は何故か鮮明に感じ取れた。

ああ、それはきつと、今オレが胸を貫いたこいつが、もうオレにとつての道標になっていたということ。いや、道標ではなく、その在り様は、ほんの少し前までのオレを写し出しているのだろう。

アゲハの体からは力が感じられない。息絶えたのかそれとも演技か。どちらにせよ、今のままでは動く事もできないので、アゲハの体から生えているような血が滴り落ちているナイフを引き抜いた。

ナイフが栓の役割を果たしていたのだろう。その栓が消えてしまつと、グチャリと、赤い血が音を立てて零れ落ちた。アゲハの体も、ゆっくりと傾き、地面に倒れこんだ。

「は、あ、はあ、は」

正直、立っているのでさえやつとだった。そんな状況で、一人の体重を支えながらよくもまあここまで持ったものだ。

でも、もう限界。体の節々はナイフでズタズタに刻まれてるし、今まで保ってきた集中力とか根気とか信念とかが、なんかもうどうでもよくなって、意識すら確かではない。

膝が折れ、ナイフを手から離してしまう。そのまま、体は、後ろに向かって引き込まれる様に倒れてしまった。

「……あれ」

なんだか、本当に限界が来たようで。

自分の周りの芝生を見てみると、何故かそのあたりだけ真っ赤に染まっていて、自分の服も、重くて、赤くて、目も薄ぼんやりとしか視界を認知しない。

何時かも忘れてしまった、あの紅い景色。

そんな景色に、オレは、組み込まれてしまうのだろうか。

そう考えて、思ったよりも実感が沸かないことに驚いた。

実はもうオレは死んでるんじゃないかと錯覚してしまうほどに、オレにはあつさりとその『死』という現象を、受け入れていた。

でも、それも意味当然。だって、オレの中には確かに殺人鬼がいて、その殺人鬼は本来、オレが横たわっている大地に埋まっていなければならないのだから。

だから、オレのこの落ち着きは、昔のオレがしなければならぬ精算を、未来のオレが受けただけと心のどこかでわかっているからこそ、こうやってオレは客観的に見れている。

……いい加減にキツくなってきた。この現実だか夢だか判断がつかない世界でまどろむくらいなら、いっそ

「死んでしまった方がマシ、か？」

「え」

霞がかった視界に、人影が映っている。そいつは、たぶん、笑っていた。

「さつき間違いに気付いたばかりだと言うのに、何を言ってるんだか。礼に始まり礼に終わる。終始一貫で最後までやってみる」

「ア　ゲハ」

「お前は、まだ誰かに必要とされているだろう？　だから、早いと

「こ戻れ。招かねざる客も来ているみたいだしな」

招かねざる客というのは、たぶんあの人だろう。こちらから向かわねばならないというのに、あの方は、なんで。

「だから言ってるだろう。お前は必要とされている。だから表に出ている。オレはその逆ってわけさ」

アゲハは皮肉げに笑っている。哀しそうな顔で、あくまでも飄々と。

それは、自分の罪が如何に重く、暗い物なのかを知っている哀しみ。今笑っているのは、自分には、居場所など必要ないと思ってしまった、一人の少年。

そんなことが、あつてたまるか。

バカ野郎と怒鳴りつけてやりたいが、体はもうピクリとも動かない。せいぜい、これぐらいしか。

「が、」

「……？」

「が、と」

「おい喋るな。いくら夢でも、死ねば現実でも精神死するぞ」

知った事か。それに、こんなこと程度で死ぬほどヤワな体ではない。伝えなければならぬことを伝えられないのは、なによりも辛いと知っているから。だから、

「あり、が、と」

この言葉だけは、伝えなければならぬと、それだけは、わかっていた。

「……ふん。そんなセリフはあの人にも言っておけ。まあ、今回だけは違う言葉になるだろうがな」

アゲハが指を鳴らす。それに伴って、周囲の景色が崩れ始めたのがわかった。

「じゃあなレオラ。今度会う時は真剣に殺し合おう。それまでは、せいぜい死ぬなよ」

……こっちは最初から最後まで真剣だったつーの。アゲハは上機嫌なのか、ナイフを弄びながら、徐々に姿を消していく。

パキン、と最後に何かが割れる音がして、オレは暗闇に落ちて行いった。

最後のセリフはそんなキザな言葉で、それがアゲハの照れ隠しだと気付いたのは、しばらく経ってからのことだった。

「、ラ」

誰かが、誰かを呼んでいる。

「オラ」

ああ、その呼ばれてる誰かっつのは、きっとオレのことだろう。だから、招かねざる客っつのは、つまり今オレを呼んでいる人なわけ。

「レオラ。レオラ」

「し、はん、だい」

明るんできた視界。戻ってきた四肢の感覚。そして、その名を呼んで、ようやく、現実に帰ってきたのだと実感した。

「レオラ……無事だったか。お前の家を訪ねても誰もいないから、もしやと思っ

て来てみれば……」

師範代はやれやれと言った感じで頭を抱えていた。

やれやれ。頭を抱えたいのは、いったいどっちなんだか。

「レオラ、ちゃんと私のことがわかってるのか？ 頭を打って中身が出たとか、そんな三流紛いの冗談はよしてくれよ」

……こっちの気なんて露知らず、二日前のことをこちらが謝ろうとしているにも関わらず、師範代は心配しているのかいないのか微妙な言葉を投げ掛けてきた。

ああ、もう、本当にこの人は。

寝転がったまま、手招きで師範代を呼ぶ。

「どうしたレオラ？ 気分が優れないか？」

「か」

「なんだレオラ。もっとはつきり喋れ」

「しは」

「まったく……」

師範代は耳を近付けてきた。それこそがオレの狙い。オレは、目を閉じたまま息を思いつきり吸い込み、

「師範代のバカヤロー……！！！！」

天地揺るがす咆哮を、本人の耳元で、鼓膜を破りかねない勢いで絶叫した。

Epilogue

そう、本当に始まりは二日前のことだったのだ。

今思えば、なんであの程度のことには激昂したのかわからない。

けれどまあ、それはオレの師範代を思う気持ちが大きかったってことで勘弁してほしい。

あの日、オレは師範代の家へ向かった。理由は……師範代の誕生日だったから、というなんともお気楽な用件である。

けれどそれが一年に一度しかない大切な日で、それが日にちよりももっと大切な人のものならば、それはけっして無駄ではないのだ

から、オレも師範代も誕生日を一緒に過ごさなかった事はない。

だから今年も、例年に違わず、イチゴのショートケーキを持参で師範代の家へ行ったのだが、なんだか、師範代の家全体から違和感が滲み出していた。

どうせまた程度の低いよからぬことでも企んでいるのだろうと、特に深く考えずリビングに向かってしまったのが失敗だった。

なんつーか、本当に思い返すとバカバカしいが、リビングは一面血の赤。その中心に置かれているテーブルに、血塗れの師範代が机に突っ伏していたのだ。

そこまで小細工は一切ナシ。ただ単に部屋中ペンキをぶちまけて、ペンキがある程度乾いたら血糊を自分にぶっつけた師範代が死んだふりをするだけ。

明らかなドッキリであり、血の臭いもしないのに、誰が騙されようか。なんて思考を巡らせられるほど、その時のオレは冷静ではなかった。

はい、回想スタート！

「し、師範、代……？」

理解までに数秒、脳が感情を表すまで数秒。痛いぐらいに握り締めた右手は、本物の血が垂れてしまいそうな程、白く変色していた。同様しただけマシだ。これが錯乱だったなら、オレは本当にアホなのだから。

右手は固く握ったまま。左手のケーキは軽く引つ掛ける程度。コツコツと靴を鳴らして師範代に歩み寄ると、なんだか、急に胸が苦しくなった。あんまりに苦しいもんだから、その場に膝をついてしまっ。

「うそ、だろ？」

涙が勝手に溢れてくる。目に溜まり切れずに雫となった涙は、頬を伝い、床に染みを作った。

胸に去来するのは今までの思い出。いい物も悪い物も全てが走馬

灯のように巡り、脳内に映し出される。

だから、その思い出こそが、余計に苦しくって。

「……あの、レオラ？」

師範代が死んでしまった今、オレは何をすべきなのだろうか。

……考え付くはずもない。今まで、オレの重要な選択に、師範代が関わらなかつたことなんて一度もなかつたのだから。

「……もしもーし？ あの、気付いてるか？ もしもーし」

こんな世界に、オレが生きている必要なんて、きつとない。こんなに苦しい思いをするぐらいなら、いつそ、この命を、

「いい加減気付けこのバカ弟子！」

ナイフを掴もうとポケットに手を入れる。それとほぼ同時に、脳天にガツンと殴られた様な衝撃が走った。

「いッ………！」

殴られて、本能的に状況を理解したのか、咄嗟に視線を上げる。

そこには、全身を真っ赤に染めたまま、バツの悪そうな顔をして師範代が立っていた。

「……レオラ。死んだかどうかの確認もせずに泣き出すのはあまりよろしくないぞ。なんと言うか、こっちが悪い事をした気分になる」

「師範代……生きてた、んですか？」

「当たり前だたわけ。私がそう簡単に殺されるタマか。それに、今日は私の誕生日だろう？ せっかく愛弟子に祝ってもらえるなら、何がなんでも生き延びるさ……って、どうしたレオラ？ 気分でも悪いのか？」

この時点で、オレの行く末はもう決まっていたのだらう。元々それ目的で来たはずなのに、その目的を果たしてないんだから、まあ、ある意味仕方なかったと割り切るしかない。

「師範代の……師範代の……」

「ちゃんと伝えたいことはきちんと伝え。ごもつてばかりじゃ伝える物も伝わら」

「師範代のバカヤロー………!!!」

ああ、よく考えれば、このセリフは二回も言っていたのか。
オレは泣きながら全力で師範代の家を飛び出した。

これが、今回の全ての始まり。誰が悪いんでもなくて、誰が責任を負うものでもない。けれど、誰も悪くないそのことに、たった一人のヤツが反発したから、こんなに疲れる事が起きてしまったのだろう。

本当に、無駄な事をしてくれた。カノンへの報告を済ませたら、お土産を持って、もう一度師範代に会いに行こうと計画していたと言つのに

「本当に申し訳ありませんでした」

オレの目の前で、師範代が木の床に頭を擦りつけている。まあ、謝られる必要はないんだけど、師範代が謝るって言うて聞かないんだから、これは仕方ない。

「ほら、師範代。もういいですって。頭上げてくださいよ」

「いや、このぐらいじゃまだ私の気が済まん。せいぜいあと二時間ぐらいはこうしておく」

「余計に迷惑です！ ほら、立つてください。これから帰るなら、列車まで時間がないでしょう」

的確にツツコミを入れてから、師範代の腕を無理矢理引つ掴んで強引に立たせる。何度かたたたらを踏んでいるが、手を握ったまま出口まで強制連行。

「おい、レオラ」

「金はオレが持ちます。師範代は先に行っておいてください。オレはケーキ買ってきますから、列車の中で食いましょう」

有無を言わず畳み掛ける。師範代もオレの気持ちを察したのか、これ以上は何も言わなかった。

便利屋を出ると、そこには既にカノンがいた。

「あ、目覚ましたんだ。くそ、あのまま永遠に眠ってくれてればよかったのによ」

「悪かったな復活して。そーいや、今日の仕事の話、明日に回してくれ。あと、キャラメルは悪かった。今度埋め合わせするから、勘弁してくれ」

「う……何かレオラらしからぬ早口で強気発言。わかったよ、じゃあ埋め合わせ楽しみにしてるから」

カノンはニヤリと笑い、意味深なセリフを吐いて去って行った。

………なんのために居たんだアイツ？

ちよつと不思議にも思ったが、あまり時間がないことを思い出す。再び走り出そうと師範代の手を引いた。すると、師範代は突然、口を開いた。

「………なあ、レオラ」

「なんですか？」

「その、お前は怒ってるか？」

「いいえ、まったく。ただ、落ち着いて話せる場所に早く行きたいなって」

「………？」

グイグイと年上の女性を年下の男が引っ張っていく姿はおかしいものがあるだろう。自覚症状があるくらいだ、それならさぞかし変に見えているのだと、少し笑みがこぼれた。

さあ、駅まであと数分。ケーキを買いに走ってギリギリ間に合うか間に合わないかといったところ。師範代に先に列車に向かうよう告げると、オレはケーキ屋に向かって全力で走り始めた。

アゲハがわざわざ汚れ役を被ってまでオレに伝えた、ほんの小さな祝福の言葉。ただそれを伝えるためだけに今回の出来事が仕組まれていたのなら、オレは見事に踊らされたのだと笑うしかない。

ケーキ屋に飛び込む。幸い、客足の少ない時間帯だったため、待たされる事なくショートケーキを二つ注文できた。

値段よりも少し多めの金額を置いて、ケーキをふんだくるようにして店を出た。

時間はもう一分ほどしかない。けれど、間に合わないなんて微塵も思わず、頭はどうやって師範代に言葉を言おうか悩んでいる。

駅のホームが見えた。改札を走って通り抜け、列車のドアが閉まる寸前に、ギリギリで滑り込めた。ケーキは極力傾けない様に注意したので、たぶん大丈夫なはずだ。

師範代の座っている座席が見えた。一度深呼吸して乱れた息を整える。

オレはゆっくりと席に近付き、師範代がオレに気付くと、左手に持っていた小さな箱を差し出す。

そして、今まで胸に溜めていた、言葉をようやく口にした。

「師範代。お誕生日おめでとーございます」

「……ああ、ありがとう、レオラ」

そのやり取りを終えると、オレも師範代の正面に腰を降ろす。そして、他愛もないお喋りに興じて、師範代の家についてからは豪華な料理を食べるのだろう。

その一連の流れに、アイツがないのは、違和感を感じるべきなのかどうなのか悩むところだが、オレの内側にヤツはいる。共に誕生日を楽しむのだとそう思いたい。

車窓の外に視線を巡らせる。空には雲一つ見当たらない。その一面青色の空がやけに眩しかった。

だからだろうか、今度アイツの家の墓参りにでも行こうなんて、柄でもないことを思ってしまったのは。

「どうしたレオラ。何か面白い物でも見つけたか？」

「いいえ、どこにでもある麦畑しかありませんよ師範代」

空にも見飽きたので、車内に備え付けのテーブルを引っ張りだし、その上にケーキの箱を置き、乗務員に二人分の紅茶を注文した。

もう間もなく紅茶が運ばれてくるだろう。そうしてオレの忙しかった半日は終わりを告げるのだ。

せいぜい後の半日は師範代とゆっくり誕生日会をすごしたいと、後に待っている主菜用のこのケーキを食べながら、オレはしみじみとそう思っただった

Fin

(後書き)

はい、終わりです(笑)

いやあ、なんと言いますか、実はこの小説に関しては裏話がありましてそれを話したいと思います。

以前、アオキチヒロさんとメールをしている際に、

「じゃあ、いつかFFを遠雷で書くよ」

「マジで!? じゃあ暇になったらいつでもいいから」

とまあ、こんな感じの会話があったわけです。

その時はノリで言ったのですが、後になって考えてみればさあ大変。そもそも作品が一人称と三人称でまったく毛色が違うし、シオン(さいしよはレオラで考えてなかった)の話はいいけどオチがないと来た。

そこで半年ほど待っていたいて、なんとかレオラの話におさまったわけです。

ここから毎日がんばってパソコンに向かい合って書くわけですが、締め切り間際になって風邪をひくという最悪のアクシデント。いや、頑張って携帯で書きましたけど。

そんなこんなで完成したこの作品。文法おかしかったり言葉おかしかったり同じ表現使いまくりの駄文ですが、いいんです。もともとプレゼント用だったから別にいいんです!

と、適当に言い訳したところでグダグダになったこのあとがきも終わりにしようと思います。

ここまで読んでくれた方に最大の感謝と敬意を。そうじゃない方も同じく感謝と敬意を。

では、また何かの作品で会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3095d/>

遠enrai雷 黒い明星の下で The under ground star

2010年10月8日15時15分発行